

高等学校の言語活動の充実に関する研究

— 国語総合、地理A、数学A、化学Iにおける実践を通して —

逸見 直子¹ 西海 達也¹

平成21年3月告示の高等学校学習指導要領において、言語活動の充実を通して、思考力・判断力・表現力等を育むことが求められている。しかし、高等学校では言語活動の充実が十分図られているとは言えない。そこで授業の中に、「考えを持つ」、「考えを広げる」及び「考えを深める」の三つの段階を設定することで、言語活動の充実を図るとともに、思考力・判断力・表現力等を育成できると考え、実践研究を行った。

はじめに

高等学校学習指導要領において、基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等を育むとともに、主体的に学習に取り組む態度を養うことが求められている。

神奈川県立総合教育センターでは平成21年度・22年度にわたり、小学校及び中学校の言語活動の充実に関する研究に取り組み、「<小学校>言語活動の充実を図る学習指導事例集」及び「<小・中学校>言語活動の充実を図る学習指導事例集」をまとめた。

そこで、平成23年度は小・中学校での研究成果を踏まえ、高等学校における言語活動の充実に関する研究に取り組むこととした。

研究の目的

本研究は、県立高校3校に調査研究協力校を依頼し、国語、地理歴史、数学及び理科の4名の調査研究協力員による授業実践を基に、言語活動を充実させ、思考力・判断力・表現力等を育成するための指導の工夫を見いだすことを目的とする。

研究の内容

1 言語活動の充実が求められる背景

平成18年に実施されたPISA調査では、我が国の生徒の学力は全体として国際的に上位にあるものの、思考力・判断力・表現力等を問う読解力や記述式問題に課題があることが指摘されている。新学習指導要領に先立ち平成20年1月17日に公表された、中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）」において、思考力・判断力・表現力等を育むために「概念・法則・意図などを解釈し、説明したり活用したり

する」や「情報を分析・評価し、論述する」（以上、中央教育審議会 2008）といった学習活動が例示されている。答申を受けて、平成21年3月告示の学習指導要領では、基礎的・基本的な知識・技能の習得とともに、思考力・判断力・表現力等の育成が求められることとなった。

2 神奈川県の現状

「平成21年度 神奈川県立高等学校学習状況調査報告書」において、記述式問題の無解答率が高いことから、「思考力、表現力、学習意欲に課題がある」（神奈川県教育委員会 2009）ことが指摘されており、生徒たちが自分の考えや意見を、理由や根拠に基づいて記述し、表現することを苦手としていることが分かる。「平成23年度 神奈川県立高等学校学習状況調査報告書」においても、記述式問題の無解答状況は依然として高いままである。国語と数学の記述式問題は各3問である。それぞれの無解答率を第1表に示した。

第1表 平成23年度神奈川県立高等学校学習状況調査における記述式問題無解答率

国語	1三 17.3%	2六 30.2%	3六 46.5%
数学	1(2)17.3%	4 45.1%	5(1)32.9%

（神奈川県教育委員会 2011 を基に作成）

こうした状況から、生徒に考えを持たせ、的確に説明したり、発表したりする力を育むためには、言語活動の充実が不可欠であることが分かってくる。

神奈川県教育委員会が平成22年に、新学習指導要領実施に伴う教育課程編成についての留意点をまとめた「神奈川県立高等学校教育課程編成基準」においても、各教科・各科目の指導に当たって、生徒の言語活動の充実を図ることを求めている。

しかしながら、県立高校の教員から「言語活動を充実させるためには、何をどう指導するとよいか」という質問が寄せられるなど、言語活動の充実を図るための指導の工夫が求められている。

そこで、授業における学習過程に「考えを持つ」、「考えを広げる」及び「考えを深める」という三つの段階を意図的に設定することにより、言語活動の充実

1 教育課題研究課 指導主事

が図られ、思考力・判断力・表現力等を育成することができるのではないかと考えた。

3 考えさせる指導

本研究では、考えさせるための指導の工夫として、「考えを持つ」、「考えを広げる」及び「考えを深める」という三段階の学習活動を設定した。

(1) 考えを持つ

生徒に、課題に対する自分の考えを持たせるために、個人で課題に取り組ませる。個人で取り組ませることで、自分の考えを整理させ、明確にさせる。その際自分の考えを記述させ、後で振り返らせるようにすることが大切である。理科の実践事例の場合は実験を行わせるため、最初からグループで学習活動を行った。

(2) 考えを広げる

生徒に考えを持たせた後、グループやクラス全体でその考えを発表させる。ここでは生徒同士による仲間との学びを行わせることが大切である。生徒が自分の考えを説明するためには、分かりやすく伝えるために表現を工夫する必要がある。さらに、ほかの生徒の考えを聞くことで、理解が深まり、自分と違った考え方や視点に気付くことが期待できる。

(3) 考えを深める

生徒に自分の考えを広げさせるだけでなく、個人で考えを深めさせる工夫をする。個の学びから仲間との学びを経て、個の学びに戻るというプロセスをたどることによって、生徒が学習目標を達成することが期待できる。生徒の考えを広げて学習活動を終えるのではなく、一歩進んで個人で考えを深めさせることにより、生徒の学びが一層深いものになる。

4 言語活動の充実を図る実践事例

本研究では、国語、地理歴史、数学及び理科の4教科で、言語活動の充実を意識した授業実践を行った。その概要を紹介する。(第2表)

第2表 実践事例の概要

科目名 単元名	単元中の 位置付け	思考力・判断力・表現力等 の育成を図る指導の工夫
国語総合 伊勢物語 筒井筒	3時間目 ／4時間	前時に、和歌の部分に入る心情に即した作品を創作させ、本時で作品を鑑賞させた後、物語の和歌と比較させた。
地理A 生活・文化を支える産業の地域性	1時間目 ／2時間	グループ編成を変えて、3回グループワークを行わせることで、農作物の特徴を考察させるとともに、説明し合わせた。
数学A 確率	13時間目 ／13時間	年間指導計画に位置付け、単元のまとめで問題を板書・説明させた。
化学I	10時間目	単元のまとめで実験の観察結果か

無機物質 非金属元素	／10時間	ら成分の違いを予想させ、発表させた。
---------------	-------	--------------------

(1) 国語 国語総合 1学年(県立藤沢清流高等学校)

ア 単元 伊勢物語 筒井筒

イ 指導観

古典作品を自分たちとかけ離れた異国語のように感じていることから、古典に苦手意識を持つ生徒たちが多い。古典作品において、より豊かな読解に結び付けさせたいと、現代に生きる生徒たちの状況や心情に引き寄せて考えさせることを意図した。

筒井筒の物語の大意を理解させるにとどめ、和歌を教えないでおくことで、生徒に物語の状況や心情を想像させる。具体的には、和歌の部分に入る心情に即した作品(現代語の短歌や短い詩)を、生徒に創作させ、実際の和歌に込められた心情と比較させる。

ウ 本時の授業の概要

前時までに創作させた作品の一覧から、まず個人で心情に即した最もふさわしいと思う作品を選ばせ、理由を記述させる。その後、グループで生徒たちが選んだ作品について発表し合い、最もふさわしい作品を二つ選ばせる。グループの代表がクラス全体に発表した後、授業者の説明を聞いて、物語の和歌の意味を理解させる。次に個人で、和歌に込められた心情を想像させて記述させる。最後に、生徒たちが創作した作品と、実際の和歌に込められた心情とを比較して、気付いたことを記述させる。

エ 考えさせる指導の工夫

(ア) 考えを持つ

- ・物語の大意を踏まえ、和歌の部分に入る心情に即した作品を創作させた際に、「愛している」、「好き」といった表現に頼らず、自然や物に譬えるようにさせる等の表現の工夫をした。(第1図)
- ・生徒たちは言葉を吟味し、状況や心情にふさわしい作品を創作することができた。
- ・授業後の感想には、「『信じています』より『信じたい』の方が相手の心に残るだろうかと考え、特に言葉の使い方を意識して、【作品1】を創作した」とあり、生徒が考えを明確に持っていたことが見てとれた。

【作品1】

あなたと同じ空 見上げているなら
信じたい いつか 願いかなうって・・・

- ・創作した作品の一覧から心情に最もふさわしい作品を、個人で一つ選ばせ、選んだ理由を記述させた。理由を記述させることで、考えを持たせる工夫をした。

(イ) 考えを広げる

- ・個人で選んだ作品をグループで発表し合い、ほかの生徒の考えを知り、心情に最もふさわしい作品を、

グループで討議して二つ選ばせた。その際、選んだ理由を考えさせることで、作品について考えを深めさせることができた。

現代版 筒井筒 「相手に届けたい言葉 こころのつづやき」 創作（抜粋）【あらすじ】

【元の妻の状況】

幼なじみの二人は互いを思い合い、念願かかって結ばれた。だが、生活が苦しくなり、男はほかの女性のもとへ通うようになってしまった。ほかの女性のもとへ行ってしまった後、美しく化粧をして外を見ながら **Aの歌** それをこっそり聞いていた男は「とてもいい」と思ってほかの女性のもとへは行かなくなった。

【河内の女性の状況】

自分のもとへ通って来ていた男が、突然ぶつり来なくなりました。 **Bの歌（男に届けた歌）** それを見て、男はやっと「今度行くよ」と言ってきた。喜んで待っていたが、「行くよ」というたびに男は来ず、むなしく約束の夜は過ぎて行った。 **Cの歌（男に届けた歌）** だが、結局男は来なかった。

※これが現代だったら、自分だったら（男子は女と男を逆にして考えてみる）、ABCにどのような歌が入るのだろうか。それぞれ状況や気持ちを考えて創作してみよう。

第1図 「国語総合・作品創作」 ワークシート

- ・考えを明確にさせるために、グループごとに討議した内容をクラス全体に発表させた。
- ・クラス全体に発表した生徒の発言からは、「【作品2】を選んだのは、明るいイメージの詩なのに、内容が切ないというギャップが良いと思ったことと、明るさを強調するためにカタカナにするのではないかと思います」とあり、グループで討議したことで、考えが広がっていたことが見てとれた。

【作品2】

ヒマワリはタイヨウだけを向いて咲いているのに
タイヨウはほかの花も照らしてる
だけヒマワリは大きくまっすぐ上を見て
いつもタイヨウを求めている

(ウ) 考えを深める

- ・この時点で初めて授業者が和歌の内容を説明し、生徒が創作した作品との比較を行わせた。
- ・個人で和歌に込められた心情を想像させ、創作した作品と和歌に込められた心情とを比較させて、気付いたことを記述させた。このことで、生徒たちは実感を持って、和歌に込められた心情を理解できた。
- ・授業後の生徒の感想に「表現の仕方は違っても伝えたい気持ちは同じ」、「好きな人を大切に思う気持ちや、ずっと思い続ける気持ちは昔も現代も共通していると思った」等の記述が見られた。生徒たちは、和歌に込められた心情を、現代に生きる自分たちの

心情に引き寄せて考え、人間の心情は昔も今も変わらないことに気付いた。

オ 実践の成果

古典に苦手意識を持つ生徒たちに、現代語の作品を創作させたことで、生徒たちは古典や和歌の世界を身近なもの、自分のこととして捉えることができた。個人で考えを持たせたことで、グループでの討議が活発に行われ、考えを広げ、深めることができた。この実践事例では、生徒の実態を踏まえ、段階を追って考えが深まるように工夫されており、考えさせるのに適した学習形態が選択されていたことから、単元目標を達成することができた。

(2) 地理歴史 地理A 1学年（県立鎌倉高等学校）

ア 単元 生活・文化を支える産業の地域性

イ 指導観

主体的に学習に取り組みせ、農業や工業の地域的な区分や産業構造などに関する知識を単に習得させるだけではなく、人種・民族・宗教・気候といった既習事項を活用させながら、主体的に学習活動に取り組みせることを意図した。特に農業分野では穀物3種類・商品作物3種類の計6作物について、グループワークを通して、その特色等を考察させる。

ウ 本時の授業の概要

グループワークを利用した情報の共有化を行わせる。まず農作物の生産国や輸出入国を統計データから一人ひとりが調べ、読み取った情報をグループ内で意見表明した後、共有する（グループ①）。次に、一人ひとりがグループで共有した情報を更にグループを組み替えて伝達し共有する（グループ②）。全員が説明者になるとともに、その中で出た意見や疑問点等を集約・整理して元のグループに情報を伝達する（グループ①）。

エ 考えさせる指導の工夫

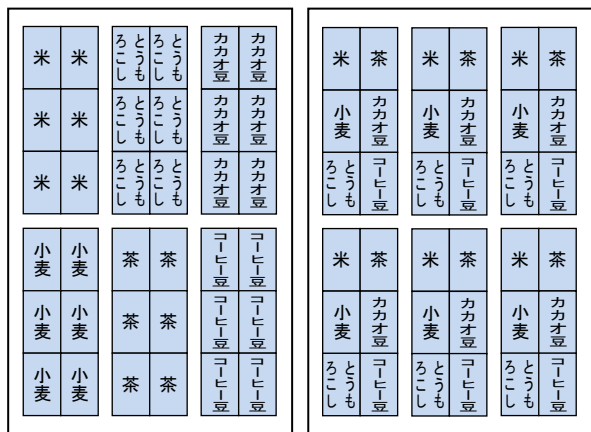
(ア) 考えを持つ

- ・授業者の説明により、穀物と商品作物の特色等について理解させた。特に商品作物は穀物と比べると全生産量に対して輸出割合が高いことも理解させた。
- ・一人一作物を担当し、その作物の生産量の上位10か国について、国名・気候・風土・地域性等について、教科書や地図帳等の資料を活用して個人で調べることで、担当した作物の特徴を考察させた。
- ・いきなりグループワークに入ると、ほかの生徒に任せきりになってしまう可能性があることから、個人で取り組みさせた後に、グループワークに取り組みさせる工夫をした。
- ・同じ作物でグループ①を作り、グループのほかの生徒と情報を共有することで、考えを明確にさせた。

(イ) 考えを広げる

- ・グループ編成を変え、異なる作物を担当する生徒で集まり（グループ②）、担当する作物について発表し合い、ほかの作物の特徴を考察させた。（第2図）

- ・グループメンバー全員が代表者となることで、生徒は主体的に取り組み、担当する作物についての理解を深め、情報を分かりやすく伝えることができた。
- ・ほかの作物との比較を行わせることにより、共通点や相違点が明らかになり、担当する作物の特徴をより深く考えさせることができた。



グループ① (1回目・3回目) グループ② (2回目)
 第2図 「地理A」グループ配置図

- (ウ) 考えを深める
 - ・元の同じ作物グループ①に戻り、収集した情報を発表し合い、情報を共有させた。
 - ・担当する作物について、集めた情報から分かったことをグループでまとめさせ、考えを深めさせる工夫をした。
 - ・「ほかの作物を調べているグループから情報収集することによって、ほかの作物との意外な共通点があると新たな発見ができた」といった感想が多数見られたことで、作物グループによって、調べる視点が異なっていることに生徒が気づき、担当する作物について多面的・多角的に考察することができた。
 - ・授業後の生徒の感想には「ほかの作物との比較が分かりやすかった」とあり、比較させることにより、担当する作物の特徴の理解を深めたことが見てとれた。

オ 実践の成果

生徒たちは担当する作物について単に調べるだけでなく、ほかのグループの生徒に分かりやすく説明し、ほかの作物の特徴に関する情報を集めてくる必要もある。ほかの生徒の説明を聞くことで、主体的に学習活動に取り組み、「それぞれの作物に合った気候や風土でなければ栽培できない」ということに気付くなど、単元目標を達成できた。

(3) 数学 数学A 1学年 (県立西湘高等学校)

ア 単元 確率

イ 指導観

問題を解く過程において、なぜその方法で計算したのか、その結果、何が求められたのかといったことを

ほかの生徒に説明する活動を取り入れ、表現力の向上を図る。さらに、ほかの生徒の説明に対して質疑応答や議論を行わせることで、自らの解法を改善し、数学的な思考力・判断力の一層の向上を図る。

ウ 本時の授業の概要

単元のまとめとして、既習の知識を組み合わせる様々な問題を解かせ、解答に至った理由や思考の経過、解くために利用した公式や法則等を明確にさせて、筋道を立て分かりやすく説明させる。

エ 考えさせる指導の工夫

(ア) 考えを持つ

- ・生徒全員が事前に指定された問題を解いておいた。
- ・指名した生徒は、任意の1問を選択し、解法と解答を板書させた。そのほかの生徒には、自分の解法と比較させた。

(イ) 考えを広げる

- ・指名した生徒に、クラス全体に自分の解法と解答を説明させ、そのほかの生徒は、説明を聞いて自分の解法及び解答との共通点や相違点について検討させた。

(ウ) 考えを深める

- ・板書の記述内容の良い点や改善点及びほかの解法や異なる考え方ができないかを、クラス全体で検討した。
- ・年間指導計画に、単元のまとめで生徒全員が順に説明させることを位置付け、計画的・継続的に生徒に説明させているので、授業者は、質疑応答の発言や発表する内容から、基礎的・基本的な知識・技能を活用して、質疑応答ができるようになっている生徒の変容を捉えることができた。

オ 実践の成果

授業後の生徒の感想に「問題に対する理解が深まる」、「改善点を指摘してくれる」、「自分の分からないところが明確になる」といった記述が見られることから、生徒が学習活動の意義や有用性を理解していることが分かった。

生徒は、他人の間違いを指摘できるようになってきており、間違いかどうかを明確に判断できない場合でも、発表した生徒に対して、自分の意見を主張することができる生徒もいる。授業者は、常に生徒の発言を尊重し、考えたことを根拠に基づいて説明させることを支援する姿勢を持ち続けることで、生徒が主体的に取り組むようになった。授業者は、生徒に説明させる指導を粘り強く継続しており、生徒も学習活動の意義や有用性を理解して、主体的に取り組んでいる。さらに、生徒がクラス全体に説明するといった学習形態の効果と、単元計画に言語活動を明確に位置付けていることで、生徒の変容を捉えることができた。

(4) 理科 化学I 2学年 (県立西湘高等学校)

ア 単元 無機物質 非金属元素

イ 指導観

無機物質の単体や化合物の性質、反応、製法など幅広い内容を学習するが、無機物質の観察や実験を通して、物質を的確に分析させて化学的思考力を育成させたい。特に、14族元素について、生徒に実感を持って理解させるために、炭素化合物とケイ素化合物に関する実験を通して、同族元素に関する基礎的・基本的な知識の活用を図る学習活動とする。

ウ 本時の授業の概要

- 炭素化合物の二酸化炭素の製法・捕集法・検出法については、既習事項であるのでグループの中で話し合っ解決させる。根拠に基づいて説明させることで、考えを深めさせる工夫をする。
- 砂を用いて、反応性を観察することで、成分の違いを予想させ、ケイ素化合物の特徴について考察させる。

エ 考えさせる指導の工夫

(ア) 考えを持つ

- 既習事項の二酸化炭素の実験では、製法・捕集法・検出法について、グループでの話し合いを通じて仮説を立てた上で、実験で確かめる課題を与えた。既習事項であっても根拠や理由に基づいて考察させることで考えを持たせた。
- ミニホワイトボードを掲示したことで、一度にグループの話し合いの結果を比較させることができた。
- ケイ素化合物では、近くの海岸の砂と石垣島の砂を用いて、塩酸を加えて反応の違いを観察させて、その違いを記述させた。

(イ) 考えを広げる

- 反応の違いから、成分の違いを予想させた。
- 各グループで生徒たちは、様々な意見を出し合うことで、これまでに習得した知識を十分活用しながら、活発な討議を行い、考えを広げることができた。
- 授業後の感想では、「自分の意見と友達の違いがあったとき、すぐになぜ違うのかということ話し合えて良かった」といった記述が見られた。このことから、個人で実験に取り組むよりもグループで討議することで、一人ひとりがより主体的に課題に取り組み、広い視野から考えることができた。

(ウ) 考えを深める

- 砂の成分の予想については、近くの海岸の砂と石垣島の砂の成分の違いを明らかにすることができた。仮説を立てて実験を行ったり、観察の結果から成分の違いを予想したりすることで、生徒が考えを深めることにつながった。
- 授業後の生徒の感想には、「地域が違うだけで砂の違いが大きいことに驚いた」という記述が多数あり、生徒が実感を持って、炭素化合物とケイ素化合物の違いについて考えを深めたことがうかがわれる。
- 仮説を立てて実験で確かめる学習活動の意義や有用

性への自覚が深まったと考えられる。「やらなくてもよい」、「少し減らしたほうがよい」といった感想は皆無であった。

オ 実践の成果

考える視点を明確にして実験や観察に取り組ませた結果、生徒たちは、砂の反応性の違いを観察することで、地域によって砂の成分が違うことに気づき、単元目標を達成することができた。

研究のまとめ

1 研究の成果

4教科の実践から得られた、思考力・判断力・表現力等を身に付けさせるための指導の工夫をまとめた。

(1) 考えを持つ

考えを持たせる指導の工夫は3点である。

ア 根拠や理由を考えさせる

「なぜそう考えたのか」、「考えの根拠は何か」と問うことで、単なる印象や感想ではない、整理された考えを持たせることができた。

イ 比較させる

生徒は比較するために、対象となるものを注意深く観察する必要が生じ、共通点や相違点を見いだすことで深く考えるようになった。その場合でも、何と何を比較し、何に着目して比較すべきかといった着眼点を明確に示す必要がある。「考えを持つ」段階だけでなく、「考えを広げる」や「考えを深める」段階においても、比較させることが手立てとして有効であることが実践事例から見てとれた。

ウ 考えを記述させる

根拠や理由を考えさせたり、比較させたりするだけでなく、更に記述させることで考えを明確にさせることができた。数式や化学反応式などの教科特有の言語で表現させることが、考えさせることにつながっており、考えたことをどのようにまとめるかの視点を持たせることで、考えをより明確にさせることができた。また、自らの考えを振り返ることができるので、記述させる工夫は重要である。

(2) 考えを広げる

ア 説明させる場面を設ける

いずれの実践事例においても、互いに自分の考えを説明し、発表し合うという課題が設定されていた。生徒が自分の考えを説明する場を設けることは、表現の工夫が必要となり、自分の考えについての理解を深めるきっかけとなった。ほかの生徒の考えを聞くことで、新しい見方や視点に気付かせることも重要である。さらに、説明を単に聞くだけでなく、説明された内容を記述させる工夫も見られ、ほかの生徒の考えを記述させておくことで、考えを深めることが期待できる。

(3) 考えを深める

考えを深めさせる指導の工夫は2点である。

ア 考えを振り返らせる

考えを記述させておいたことで、振り返りが可能になる。ワークシートに思考の流れを記録させることで、生徒自身の力で、自らの考えが深まったことを自覚させるきっかけを与えることができる。いずれの実践事例においても、教員が説明するのではなく、生徒自身が考えを深めることで、単元目標を達成したと言える。

イ 計画的・継続的に取り組ませる

「数学A」においては、年間を通じて指導計画に位置付け、生徒全員に順番に必ず説明させることで、生徒の変容を見とることが可能になった。授業後の生徒の感想にある「発表を上手になるにはやるしかない」、「人に理解してもらうために表現をいろいろと工夫する」等から、生徒たちは学習活動の意義や有用性を実感していることが分かる。言語活動を計画的・継続的に指導計画に位置付け、生徒に取り組ませることの重要性を確認することができた。

「数学A」だけでなくほかの科目でも、生徒に発表させる学習活動を地道に継続していくことで、更に思考力・判断力・表現力等を向上させていくことが期待できる。

2 今後の課題

「考えを持つ」、「考えを広げる」及び「考えを深める」の三段階の学習活動を行いながら、言語活動の充実を図るための効果的な指導の工夫を探り、一定の成果を得たが、課題も残った。

課題に対する自分の考えを持たせるために、例えば「数学A」では事前にあらかじめ問題に取り組ませて計画的・継続的に指導したが、生徒の取組みが不十分なときは、質疑応答や議論が活発ではなかった。授業の中では、一人で考えたり、説明をしたり聞いたりする時間の確保が必要だが、同時に授業の進度も考えなければならない。授業展開を効果的に行うためには、例えば、家庭学習等の授業時間以外の生徒の主体的な取組みを積極的に活用することが考えられる。生徒の主体的な取組みと授業をどのように効果的に結びつけることができるかは、今後の課題である。

また、考えを持たせ、考えを広げさせ、考えを深めさせる授業を行うためには、様々な指導の工夫が必要である。より効果的な指導を行うには、言語活動の充実を単元指導計画や年間指導計画に適切に位置付け、計画的・継続的に行うことが必要であり、そうした取組みの一層の徹底が、引き続き今後の課題と言える。

3 言語活動についてのまとめ

研究を通じて、生徒が言語活動を行うことで、教員の講義・説明主体の一斉授業にはない良さを見いだすことができた。

- ・「考えを持つ」、「考えを広げる」及び「考えを深める」という三つの段階を授業過程に設定し、適切な言語活動を行うことにより、生徒が思考力・判断力・表現力等を身に付けていく様子が見られたことから、言語活動の充実が、思考力・判断力・表現力等の育成に極めて重要であることが分かる。
- ・生徒が言語活動を行い、主体的に学習に取り組む態度が引き出されたり、ほかの生徒の考えを知ることにより前向きになったりといった等の生徒の変容が見られたことから、言語活動を積極的に取り入れることで、授業そのものをより活性化することができる。
- ・授業中のグループワークでの様子等から、「考えを広げる」段階を授業過程に設定することで、話し合ったり、ほかの生徒の説明を聞いたりする中で生徒同士の相互理解が深まり、生徒のコミュニケーション能力の育成にも大きな効果があることが分かる。

おわりに

当センターでは、「＜高等学校＞言語活動の充実を図る実践事例集」を作成し、当センターWeb ページからダウンロードすることができるので、併せて参考としていただきたい (<http://www.edu-ctr.pref.kanagawa.jp/>)。なお今年度の研究を進めるに当たり、ご協力いただいた4名の調査研究協力員の方々に、感謝したい。

[調査研究協力員]

県立藤沢清流高等学校	小島 智子
県立鎌倉高等学校	辻 宏道
県立西湘高等学校	落合 誠
県立西湘高等学校	鎌田 千春

引用文献

- 神奈川県教育委員会 2009 「平成 21 年度神奈川県立高等学校学習状況調査報告書」 p. 6
- 神奈川県教育委員会 2011 「平成 23 年度神奈川県立高等学校学習状況調査報告書」 pp. 20-21、p. 30
- 中央教育審議会 2008 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）」 p. 25

参考文献

- 神奈川県教育委員会 2010 「神奈川県立高等学校教育課程編成基準」 pp. 14-15
- 神奈川県立総合教育センター 2008 「高等学校版 授業改善のための授業分析ガイドブック」
- 神奈川県立総合教育センター 2010 「＜中学校・高等学校＞数学・理科授業づくりガイドブック～思考力・判断力・表現力の育成に向けて～」